



日本初の国立公園に指定された雲仙。雲仙観光ホテルは、外国人観光客誘致の国策として昭和10年に開業した。スイスシャレー様式の山小屋風建築。館内の至る所に細やかな意匠が施されている

わっている人たちは、観光とは何か・地域文化とは何か、自分たちの地域について改めて考える時期に来ているのではないかと思っています。

名物や名所を駆け足で巡っていく団体旅行から、一カ所にゆとりと滞在する個人旅行へと変化し、現代の旅のスタイルは原点回帰しているように思います。雲仙も、古くは上海に居留していた外国人たちの避暑地として栄えた歴史があります。普段の生活からひと時解放されたて、お気に入り場所で自分のために時間を使う。そうしたお客さまをお迎えするにあたって、改めて自分たちの地域の魅力とは何かを考えてみれば、雲仙はその歴史こそが重要であり、魅力の根源ではないかと思うのです。

日本にまだ「リゾート」という言葉がなかった時代、軽井沢に先駆けて高原リゾート地として開かれたのが雲仙です。自然豊かな山間の町でありながら、現在もどこか洗練された空気が感じられるのは、その歴史ゆえかもしれませぬ。現在、多くの観光地が新名物を創ったりイベントを仕掛

けたりと、より多くの人に注目してもらえようような策を練っています。当ホテルも含め、お店や観光施設などが、まず自分たちの地域の魅力がどこにあるのか、またそれが時代ごとに変化するお客さまのニーズにきちんと向き合っているものかを考えることで、数ある観光地の中でも唯一無二の存在になっていくのではないのでしょうか。

そのために重要になるのが、人材育成。当ホテルも、勤続40年以上という生き字引のようなベテランから、学校を卒業したばかりの若者まで幅広い年代・経歴のスタッフたちが働いています。それぞれの仕事に対しての熱量を均一にすることは難しいのですが、「自分なりに考えてお客さまに雲仙の魅力伝える行動をしよう」と努力することは、経験値の差など関係ありませんよね。首都圏のシティホテルと提携し、人材交流を行って互いに外部からの視点を入れることで若いスタッフはもちろん、ベテランスタッフのモチベーションも停滞しないよう取り組んでいます。

■雲仙観光ホテル
長崎県雲仙市小浜町雲仙 320
☎ 0957・73・3263
www.unzenkankohotel.com

九州を愛する人々に聞く

これからの九州、
どうしていくべきですか？

Dream 71

九州に本社を持つ企業や団体のトップに九州の未来にできること、これからの夢を語っていただくシリーズ、今回は株式会社堂島ビルディング 取締役ホテル事業部長・雲仙観光ホテル 総支配人 船橋 聡子さんにお話を伺いました。

観光地が考えるべき “原点回帰”

私の出身地は名古屋ですが、九州という地域には以前から大きな魅力を感じており、何度も旅行で訪れていました。長崎を旅行した際に予定が空いてしまったので、小浜温泉に行ってみようと思いましたが、同じ長崎県内であるのに地域の文化や雰囲気が多々異なっており、驚いたのをよく覚えています。さらに山を登って雲仙地区に来てみると、また雰囲気ガラッと変わる。小浜は海沿いの古き良き温泉街であるのに対し、雲仙は山間の高原リゾート。ちなみに、その時は当ホテルにランチのために立ち寄ったのですが、建物の美しさ、歴史を重ねて増した風格に一目ぼれし「将来はこういうホテルで働こう」と決意したんですよ。

さて、当ホテルの名前にも「観光」という言葉が入っています。が、もともとこの言葉はどのような意味を持つかご存知ですか？中国の『易経』に由来する言葉で、国の光（威光）を観ること、という意味があります。国の光とは、それぞれの地域が持つ文化や特色。ホテルも含め、九州の観光業に携

株式会社堂島ビルディング

取締役ホテル事業部長・雲仙観光ホテル 総支配人

船橋 聡子 ふなはし さとこ

◎プロフィール

愛知県名古屋市出身。オレゴン州立大学にて観光英語を習得後、スイス NSH ドイツ語学科卒業。大手シティホテル接客部、外資系ホテル宿泊営業部、在外日系ホテル開業準備室に於いて、ゲストサービス基盤の立ち上げ、マーケティング戦略・広報に従事。他、国内外に於いて、皇族、各国大使など VIP 接客マネジメント、マーケティング戦略・広報、オペレーション管理などに従事。2015年より雲仙観光ホテル総支配人に就任。

